

2021年 7月 18日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「わたした。恐れることはない。」 マタイによる福音書 14章22-36節 高橋彰

◆湖の上を歩く

14 22 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に^{ふね}乗せ、向こう岸へ先に^{あいだ}行かせ、その間に^{ぐんしゅう}群衆を解散させられた。23 群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。24 ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。25 夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。26 弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。27 イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心なさい。わたした。恐れることはない。」28 すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」29 イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。30 しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。31 イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。32 そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。33 舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。

◆ゲネサレトで病人をいやす

34 こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いた。35 土地の人々は、イエスだと知って、付近にくまなく触れ回った。それで、人々は病人を皆イエスのところに連れて来て、36 その服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

弟子たちが乗った小舟が湖で嵐や逆風に遭うエピソードは、8章23節以下にも記されていました。この嵐の中の小舟というモチーフは、かなり早い時期から「この世にある教会」、キリスト者たちの姿を表現するものとして解釈され、そのイメージが用いられています。世界教会協議会(WCC)や日本キリスト教協議会(NCC)のロゴマークもそうです。

逆風の中の小舟のエピソードはマタイ、マルコ、ヨハネ福音書でパンと魚の供食の出来事のすぐ後に続いて記されています。イエスによる祝福により、人びとに主の憐れみが浸透し、人びとの心が分断から分かち合いへと方向転換されるような恵みの出来事のすぐ後に、再び自分たちの知恵や力ではどうにもできないと思われるような苦難、いのちの危機の恐れが弟子たちを襲います。しかも、8章ではイエスが共に舟の中におられたが、ここでは、イエスは不在で、しかもイエスが強いて、弟子たちをイエス抜きで舟に乗せて出発させたことがあります。イエスに導かれ、信じて進んだ道であっても、弟子たちにとっては思いがけない苦難や危機に直面するのです。元漁師たちの経験があっても手に負えない。わたしたちにも思い当たり共感することがあるのではないのでしょうか。イエスはひとり、「山」に登って祈っておられたとあります。山上は5-7章の説教、またその背後にはシナイ山のモーセの出来事をも想起させられます。イエスが何を祈られていたのかは記されませんが、わたしたちはその祈りがわたしたちと繋がっているであろうことを、イエスから教えられた「主の祈り」の言葉で確信します。



真夜中の暗闇で、逆風ゆえに苦難と危機の中で立ち往生する弟子たちにイエスは近づいて来られます(湖上とも湖畔にいたとも読めます)。いい大人が「幽霊だ」と怯え叫びます。人の弱さの真実味があるように思えます。イエスの「わたした」という言葉は、イスラエルの神信仰の伝統では深い意味があります。神ご自身が顕れる宣言です。イザヤ43章の預言は水の中を通り過ぎる時に同伴され、呼びかけてくる神を語ります。神殿礼拝でも特別に用いられました(詩編46:11他)。水の上も神の道であると預言者や詩人たちは告げ、神賛美をしています(詩編77:10、ヨブ9:8他)。弟子たちはイエスこそが神の子、主であると拝みました。これは神を信じることについての大きな転換と告白です。神が遠くにおられる方ではなく、イエスという方として自分たちの所に来てくださり、助け、導き、同伴してくれている、それがわたしたちを恐れから安心と信頼へと変えるというのです。

ペトロのエピソードは復活の主イエスとの出会いとも重なる記述です。つまりイエスの臨在は復活後のイエスへの信仰と重なります。だからイエスへの信仰と同伴は、直弟子たちだけでなく、今を生きる私たちにも言えることなのです。「主よ」と何度もイエスに呼び掛けて願い、イエスに向かって足を踏み出すペトロに、主イエスに対する愛慕と情熱を感じられます。しかし強い風に気を取られイエスから目と心をそらしたとき、怖れと疑いが生じて沈みそうになります。しかしイエスは手を伸ばして捕らえてくださいます。信仰薄い者がイエスに引き上げられてイエスと共に生きる。バプテスマを受けるとは、イエスへの信頼と同伴が私の人生に起きていると信じることだとも言えます。

イエスはゲネサレトで惜しみなく「皆」をいやすされます。服のすそに「触れられる」ことさえ許します。これが論争となります。